

古典に見る「家庭教育」

渥美かをる（遺稿）

わが子の教育について、日本人は昔もやはり熱心であったと私は考える。

「人間何が悪いと言つて、わが子を甘やかすくらい悪いことはない」（本朝二十不孝）とは、西鶴の名言であるが、すでに源平時代に月輪閑白はそれを実践して、五才の長男を後白河院の妃建春門院の許に託して教育を受けさせていたのである。家司が時々その様子を見に行つて、「若様は一段とお立派になられました」と報告すると、閑白はひどく喜んでゐる（玉葉）。建春門院は当時最高のマナーを身につけた優人で、清盛もまたその子宗盛をあげていたのである。この外経正が仁和寺で教育を受けているが、これは貴族社会としては常識的なケースである。

『源氏物語』の雀巻を見ると、紫上が養

育している明石姫君（八才）について、どのような物語を与えたらよいかと、源氏夫妻が真剣に語り合つてゐる。「誰からも非難されない姫君」に育て上げるのが源氏の理想であつたが、紫上はすでにそれを十分心得ていて、より細心の心構えを持つていたのである。現代のように幼児向け絵本がない当時では、「女子供」は一括視され、子供のうちから大人の読む物語に親しみながら成長するのが普通であつた。従つて源氏夫妻はよくよく教育熱心な親として特筆すべきで、これはすなわち作者紫式部の家庭教育論に外ならない。

藤原師尹はその娘芳子（後に村上天皇女御）にお妃教育として、「一に書道、二に琴、三に古今集二十卷の暗誦」（枕草子）を指示したが、このうち（三）は当時大きな話

題となつた（榮花物語・大鏡）。親たるもの、昔もわが子良かれと頭をひねつたことである。

鎌倉期に入ると、政權を武士に奪われた宮廷貴族は、男女を問わず幼時から源氏物語を読まされ、成長すると優雅な源氏の世界を生活のなかに浸透させたのであるが、その反面、政治ぬきの宮廷貴族は、ひまに任せて人倫を乱したことも事実である。和歌の修業に伊勢・源氏を必修とした当時の教育が、あらぬ方にも実践された例であると私は見る。

では武士の教育状況はどうか。これは当時の貴族に比べると真摯そのものと言えようが、異例特例も出てきて、つくづくと教育のむづかしさ、その威力の恐しさに慨嘆させられることである。

『曾我物語』では「雀百まで……」の諺の重みに驚かされる。河津三郎が殺された時、その妻は幼い兄弟を膝に並べて、「十五にならば敵を討ち、わらはに見せよ」と泣いて訴えたのであるが、この頃の彼女は滅法きつい女で、懐妊中の子が生れたら不

要の子として捨て、自分は尼になるつもりでいたのである。ところがその後兄弟を連れて曾我氏と再婚すると、懸命に敵討を阻止するのである。しかし兄弟の心はも早戻らず、十八年の忍苦の末、ついに本望を遂げることになる。

『太平記』では集団自決が頻発する。鎌倉幕府倒壊の場面を例にとっても、あちこちの寺院で、形勢不利と見てとるや、忽ち二列に向き合い、四十人、六十人と腹かき切って凄惨を極めてゐる。太平記ではこれが全国的に及んでいる。かかる「武士道」の全国的徹底は、一体誰が教育したのであろうか。

それは北条執権が宋学を尊重したことと無関係ではないと思う。地域単位で忽ちのうち全国的に拡がったように思うのだが、私にとってこのことはまだ定かではない。しかし何れにしても「教育」の力の恐ろしさをひしと感じとることである。

ところで、私が真実心を引かれるのは、平家が「民族教育」ともいうべき、独得の教育を行ったに相違ないと思うことである。

まず六波羅に一族が集団生活を営んだことが注目される。親類同志はとかくトラブルが起り勝ちなことを百も承知の上で断行したのである。上古は知らず、一体いつの世、いかなる氏族が、かかる生活を敢行したのであろうか。寡聞にして私はそれを知らない。

清盛が白拍子祇王を妾の一人としたことは、中国の高級貴族の真似をしたことであって、当時日本一の中国通であった清盛の得意とすることであつたと、私は先に書いたことがある。(人物日本の女性史、第三巻)。ここでまた少しく触れると、延慶本平家物語の「祇王」の段に見える清盛の素顔には、縁あって夫婦となつた以上、努力して最後まで添いとげようとする心構えが見られた。夫婦の和、一族の和を求めてやまない清盛は、六波羅のあるじを継母とその子頼盛に譲り、自分は一步退いた位置にあつて一族の統率と和を計つていたのである。この清盛の心が、その没後妻の時に受け継がれたことは、疑いない。では清盛夫妻は具体的に言つてどのよう

な一族教育をしたのであろうか。それは皮肉にも都落以後に成果が現われるのである。

まず「統領宗盛の命に逆らわない」ということが挙げられる。このことは平家物語の随所に見られる。次に私は具体的な教育内容を『建礼門院右京大夫集』に見付けたのである。それは資盛が都落に際して、愛人右京大夫に次の言葉を与えたことによる。都落とぎまつた以上、今は「昔の身」と思ふまいと覚悟をしています。……すべて只今からは身を変え、「武士」になつたと思ひ切つてゐるのですが、ともすれば「貴族」の心にフト戻るのが残念です。

これによつて平家の一族教育の眼目は、「貴族」と「武士」とを使い分けることにあつたと言えるであらう。昨日まで和歌管絃に打ち込んだ貴族としての自分は、今日も早武士としての自分に成り切らうとするのである。そしていさぎよく合戦し(公達は合戦に案外強い)、仲良く壇浦に滅びたのであつた。清盛夫妻がかかる一族教育を行ったと見る時、平家物語の魅力の因の一端が解かれる。